

硫黄島研修を通して

○文化について

今回の研修で硫黄島の文化について触れる機会はほとんどなかったが、島内には西アフリカ一帯の伝統楽器である手のひらで面を叩き、音を奏でる太鼓、ジャンベを学ぶための学校、ジャンベスクールが存在した。過去には実際に現地（西アフリカ）の人を招いたこともある。ジャンベスクールでは島外出身で興味のある人をジャンベ留学生として焼く半年の間ジャンベを学ぶ制度がある。彼らは留学生であると同時に島内の重要な働き手の一員でもある。ジャンベは大きく分けて3つの打音からなり叩くリズムや音の順序を変えることでその表現の幅はさまざまであった。また、初心者や経験者関係なく扱いやすい点も特徴である。フェリー入港と出港の際にジャンベの演奏やダンスを見ることができるのも硫黄島の特色のひとつであるように思える。

歴史的な面では、平安時代の僧である「俊寛」が鹿ヶ谷の陰謀によって島流しになった際の流刑地であることもあり、俊寛を祭った俊寛堂があり、中村勘三郎が歌舞伎「俊寛」を硫黄島で行ったことが過去にある。また、源平合戦の壇ノ浦の戦いで平時子とともに身を投じたと言われる安徳天皇が実は生きており硫黄島に流れ着き生きていた（諸説あり）と言われる伝説もある。実際に子孫が代々硫黄島で生活をしてきた時代もあり、彼らは「天皇さん」と呼ばれ、島で何か決めごとをするときは天皇さんに確認をとっていたという。

○島内について

硫黄島内で食料を手に入れることができる場所は限られており、物価も本土や他の離島と比較して高いように感じた。そして限られた場所においても最低限の物資しか置かれていない。そのため観光や仕事で硫黄島を訪れたとしても「食」という点で硫黄島に来たことを感じることは難しい。硫黄島を訪れる前に事前に予約をすることでご当地グルメを食べることができるようだが頻りに運航していないフェリーが欠航したときのことを考えると予約をしておくという選択も簡単ではない。

島民の人数は少なく一人で複数の仕事を掛け持っている。また、自然整備活動を島民に呼びかけ、賃金を支払って島の環境を維持している。実際に現地で私たちが案内してくださった方も3つの仕事をされていた。島内の宿泊施設の数

やその収容人数も多くはない。以上のことを考慮すると、仮に硫黄島に多くの島外者が訪れたときに仕事が重なって対応ができない、食料枯渇が起きる可能性が高い。また、宿泊人数が限られていることは団体での観光や宿泊を制限する要因にもなりかねない。

硫黄島に移住すると仔牛1頭か金一封をもらえるようで、他にも世帯や子供の人数に応じて補助金がもらえるなどの政策が行われている。

硫黄島では昔から共通のゴミ廃棄場所（おもに粗大ごみや缶・瓶などの燃えないゴミ）があり、何十年にも渡って積み重ねられてきたゴミが放置されている。今ではその計り知れない量のゴミを地道に処理している方もおられるようで少しずつ廃棄場所のゴミの量は減りつつあるようだ。可燃物についても島の焼却場所では高温で燃やすことができないため、ダイオキシンなどの人体に有害な物質が生じることもありゴミに関してはかなり難しい問題であると感じた。

○自然について

人工的な光が少ない離島ならではの自然として星空を楽しむことができた。星を無数に確認することができ、人工衛星を確認することもできた。また、野生のキジが生息しており

硫黄島の自然は地学的な側面から見るとかなり魅力的で学ぶのに恵まれている土地であると感じた。硫黄島は決して大きくはないのにもかかわらず島内のいたるところでたくさんの地層・断層を観察することができそのパターンも様々である。また、島の名前でもある硫黄が火口付近だけでなく海底からも噴出しており浜辺や港周辺の海面は硫黄で覆われている。その海面を覆う硫黄は風向きや天気によっても度々見える景色を変え、硫黄島を訪れるたびに違う景色を楽しむことができるという。潜ると海水は透き通っておりとても神秘的な海で実際に見るとかなりの衝撃を受ける。硫黄島近海は透明度が高いため丘の上からでもウミガメを観察することができた。硫黄島が活火山であることから他の離島では見られない自然的な特徴が他にも複数ある。浜辺の砂を手で掘ってみると天然の温泉が湧きだしてくるということもある。硫黄島は温泉島であり中でも海岸沿いにある天然温泉は知る人ぞ知る秘境温泉として名高い。ものすごく高温であるが海岸沿いにあるその温泉から見える景色は波しぶきがあり、開放的であり、何より絶景で本土の海沿いに造られた人工的に設計された温泉では決して感じるこのできないよさがある。温泉のp hが約1という点も自然ならではのことだと思う。

自然の活用方法という点で考えてみると現在はジオパークに認定されているということを売りにしてツアーを計画し自然を「楽しむ」ことが主流である。しかし、「楽しむ」を売りにするだけでなく「学ぶ」を優先した取り組みがあつて

もいいのではないかと思う。硫黄島は小学生や中学生の時に学ぶ地学分野の内容をほとんど直接観察出来たり触れたりできることから本土と限らず他の離島の学生の宿泊学習や野外活動実習の適地だと思う。実際にそのような活動が行われているかというところではなく特徴的な島の地形を上手く活用できていない気がしてとても勿体ないと感じた。そのため県の教育委員会と連携するなどして島に子供たちを迎え入れ、理科学的な地学的なことを直接学ぶことができるようなプログラムができると他の都道府県の小中学生ができない特別な経験をすることができる。教科書ではなく直接触れることによって、その事柄が覚える対象ではなく理解の対象になり、ただ宿泊学習や野外活動実習を行うよりもより価値のある時間を過ごすことができると思う。ただ、人数が多い学校だと島内に収容できなかつたり、収容できたとしても同じ団体が同じ施設内に宿泊できなかつたりという問題が生じるのでその対策を練る必要がある。

○農業、産業的観点

硫黄島を案内してもらっているとき、たくさんの植物が目映ったがよくよく観察すると、それらは限られた数種類の植物であった。このことは硫黄島では限られた植物しか生存できないことを意味している。原因は火口から流れ出る火山ガスである。この火山ガスに耐性のある植物のみが生存できる。そのため島に農業はないといっても過言ではない。葉物野菜は火山ガスに負けて枯れてしまうという。実際に私自身は島内で畑を確認することができなかった。このようなことが原因で島での食事はバリエーションが豊富ではなく島外からの移住者には限られた食材のローテーションなので飽きてしまうという方もおられた。主要な産業は話によると畜産業である。雌牛が島内の数か所で放牧されていた。精子バンクから調達される優秀な遺伝子を持つ精子による人工授精を行い出荷している。高値で取引されているようだ。

硫黄島で生存できる限られた植物の一つがツバキである。ツバキは落ちた種から搾り取ることができる植物由来の椿油が有名である。ツバキの落ちた種を拾うことは容易ではない。草に覆われた土地では探すのに一苦労する。しかし、硫黄島の椿の周辺の地面はコケに覆われており種を拾うことは容易である。現状で硫黄島の代名詞となるような産業を作るにはツバキを利用するほかないと思う。椿油は髪や顔、肌につけると艶が出たり保湿効果があつたりする。ほかには石鹸に利用される。硫黄島ではうどんの麺を作る際に椿油を練りこんだものを特産品しようという試みがある。ツバキは植物由来で人にいい効果をもたらすことが多いため、知名度、付加価値をつけることで硫黄島の重要な産業になるのではないかと感じた。

総括

1泊2日の短時間で島の魅力を十分に体感することはできてはいないと思うが、特徴的な環境が生み出した他にはないような自然がたくさん詰まっており、まだまだ人々に知られていない魅力的な硫黄島があった。